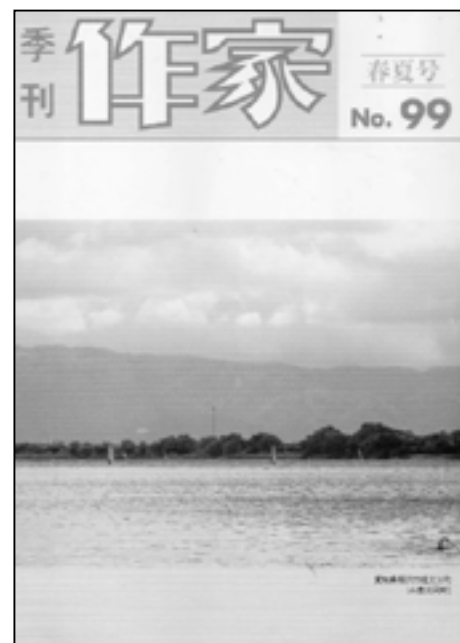


季刊作家 愛知県

門戸は広く 豊かに生きるために

『確証』で芥川賞を受賞した小谷剛氏が主宰をしていた文芸同人雑誌『作家』は、彼の死により五百十六号で終刊した。小説を発表する場所を失った同人たちは路頭に迷った。小谷氏の薫陶を受けている同人も少なからず存在し、リニューアルした雑誌の発行を望む声も多く聞かれた。

それに応える形で、小谷氏の盟友の『長良川』で直木賞を受賞した豊田穰氏が編集責任者となって一九九二年（平成四年）の春『季刊作家』が誕生した。当時五十七名の同人が参加し、年四冊の発行で始めることになった。毎月発行されていた『作家』は四半期に一冊に減ったが、作品の集まりも資金繰りにも懸念されることはなかった。その後、柳瀬道夫氏、今瀬憲司氏等に編集代表が交代し、筆者が編集代表を引き継いだのは二〇一二年夏号（第七十七号）からで、現在に至っている。本年四月一日に第九十九号を発行し、この間に掲載した小説は六八一余編になる。この十月には百号を発行する予定になっている。創刊号から三十年になる。長い期間のようにも思えるが、過ぎてしまえばそんなに長く感じられることもない。



この三十年の間に、鬼籍に入った施設に入所したり、高齢や病などそれぞれの事情で、離れていった同人は多く、現在の同人数は二十人にも満たない。年四冊の発行も三冊になり、今は二冊となってしまった。同人数も年を経るにつれ一人減り二人減りという状態であり、たまに加入があっても若い人の加入はない。時代が変わり、同人雑誌に小説やエッセイを書くこととする人が減ったのであろうか。創刊時のような余裕はなく、書き手の減少はそのまま原稿の集まりも資金繰りもままならない事態を招いて、危機的狀況が続いている。例えば創刊時点での『文學界』の同人雑誌評に寄せられた雑誌数を調べてみると、百六十余

小谷剛の「作家」を引き継ぐ

冊を数えるが、その後を引き継いだ『三田文学』に寄せられている雑誌はその三分の一ぐらいであろう（推測であるが）。むかしは同人雑誌に執筆することにより小説を書く技術を磨き、プロ作家を目指す書き手も普通に存在したが、今はそういう崇高な志を持つ書き手はまれで、読書が好きでも創作することまではいかない、あるいは同人雑誌で修業を積んで作家を目指す人も減少していると思われる（アニメ作家のほうは逆に増えているような気がするが）。だから、同人も増えていかないのだろう。憂える状況は全国的に広がり、多くの同人雑誌も同じ悩みをかかえていると察せられる。わが『季刊作家』も同様で、この先いつまで発行できるか不安だ。

心を湧き立たせる生き甲斐



「季刊作家」創刊号

一方、こんな現状にあっても、大手の文芸雑誌の新人賞への応募は、以前と変わらず、否、むしろ増えている文学賞もあるようだ。二千編を超える応募数の文学賞も珍しくない。同人雑誌で育ち、そこからプロの作家を目指すことは困難で、そうであるなら、まずは新人賞を受賞して注目されるほうが手取り早いということなのだろう。最近では活字離れが進み、月に一冊の本も読まない若者も多いと聞くが、あにはからんや新人文学賞は若者からの応募が少なくないようだ。そんな若者が目を見張るような傑作を書けるとは思えないのだが。そうであるなら、同人雑誌に加入して、小説修行をする方法もあると思ってもよいだろうが、忙しい世の中に生きている若者は、時間を持って余している老人のように、同人雑誌に小説等の文章を書いている暇などないということか。現代の若者には、小説を書いて自身の能力や運を計り、駄目なら諦めてほかのことを探ろうとするようだ。

悲観的に考えることが多いが、小説を書いて完成し、それを読んでもらおうという行為を長い間続けている筆者には、これほど心を湧き立たせる生き甲斐はほかに見当たらない。いつでもスムーズにペンが進むわけではないが、一度味わったら虜になるに違いない。書くことは、いつでも何歳からでもできる。それに手書きだった原稿も、今ではパソコンで書けるようになり作業も格段に楽になった。筆

者も三十年近くパソコンで書いている。

筆者は時折ぶらっとスーパーへ足を運ぶことがある。すると嫌でも多くの老人が、長椅子に腰かけて休憩をしている姿が目にとまる。こういう姿を見ると、この人もあの人にも退屈地獄に病んでここに来ているのだと思ってしまう。豊かに生きようとしている人はこんな所で無駄な時間を潰していないからだ。三年ほど前からコロナという厄介なウイルスが流行しているが、執筆する行為は巣籠り状態で行うものなのでそんなに影響はないと思う。もともと小説を書く行為は、孤独な作業であり、孤独に打ち勝つ強靱な意思が必要であり、しかしそれが作品として完成すると、この上ない喜びとなって報われるのだ。それは、人が、より充実した人生を生きることでもある。

(季刊作家代表／祖父江次郎)

季刊作家

編集事務局代表 祖父江次郎

〒495・0013

愛知県稲沢市祖父江町二俣上川原八四・二

TEL 0587・97・5472

mail: ch00987@yahoo.co.jp